

醜いと言われて婚約破棄された侯爵令嬢ですが、
狂犬公爵様に溺愛されて幸せです

プロローグ

「あなたは……？ 何をなさって……」

オデットはぼんやりとした意識の中でそう尋ねた。

薄らと目を開けると光が眩しく、再び目を閉じてしまいたくなる衝動を堪える。

——思うように体が動かない……

体がずっしりと重く感じるのは、身動きができないように何者かが上に覆い被さっているからなのだろう。

その事実には気づくと同時にこれまでぼやけていた視界が鮮明になり、オデットは自分の上に跨っている人物をはっきりと認識した。

「ろ、ロイ様!？」

「しーっ！ 大きな声を出すな」

「一体何を……」

「静かにするんだ、人が来る。くそ、眠り薬の効果が弱かったようだな」

オデットは何を言われているのかわからずに首を傾げたが、突然ロイが体をまさぐるように触れ

てきたことでハッと意識を取り戻した。

「きやつ、何をなさつて……やつ……」

そこにいたのは、カシルミアの第二王子ロイ・アクセルであつた。

彼はハリス侯爵の娘であるオデットの婚約者で、来年には式を挙げる予定となつている。

よく見ればここはロイの自室だろうか。

だがなぜ自分が彼の寝台の上に横たわっているのかわからない。

確かロイからの招待を受け、城へと足を運んだのだ。

そして彼の部屋へと案内されたが、貞淑なオデットはそれを断つた。

未婚の男女が密室で二人きりになるなどあつてはならないこと……というのは建前で、本音を言えよこの婚約者のことを信用していなかったからだ。

オデットよりも二つ年上のロイは、見た目こそ美しく王子の名にふさわしい出で立ちをしているが、残念ながら中身がそれに伴っていないかつた。

勉学には身が入らず、騎士団に交ざつておこなわれる鍛錬も欠席しがちだと聞いている。

唯一積極的なのは社交の場だけ、それも美しい夫人や令嬢と接する時だけなのだ。

なぜこんな相手と婚約を結んでしまったのか、オデットはもはや諦めの境地に達していたと言っても過言ではない。

ハリス侯爵家は名門貴族で社交界でもその評判は高く、オデットはまさに高嶺の花と呼ばれる存在だつた。

亜麻色の流れるような髪に、儚げな薄紫の瞳。

そして美しく弧を描く真つ赤な唇は、見る者を魅了した。

その存在がロイに知られてしまうのは、時間の問題であつたのかもしれない。

彼は当時婚約者を探していたものの、自らの立場をひけらかして妃候補の令嬢たちに難癖をつけてばかりいた。

家柄がよくとも見た目の美しさがロイの求める基準に達していなければ、ただそれだけの理由で候補から外されてしまうのだ。……彼女たちにとっては幸運だつたに違いないが。

当時のロイはオデットの美しさを耳にするや否や、すぐにハリス侯爵家へと遣いを出したらしい。至急ということでオデットは城へ呼び出され、彼と対面を果たすこととなつた。

そしてその美しさにロイが心を奪われたことで、半ば強引に婚約が取り決められたというわけだ。もちろん第二王子の評判はオデットの父であるハリス侯爵の耳にも届いており、侯爵は当初婚約を辞退する旨の証書を国王に提出している。

しかしその抵抗も虚しく、ロイの強い希望に折れる形で、国王から侯爵家へ婚約を懇願する書簡が送られてきてしまったのだ。

カシルミアの一貴族であるハリス侯爵家が、王家の意向に背くことなどできるはずもなかった。こうしてオデット本人の意思とは関係なく、いつのまにかロイとの婚約は決定事項であると外堀を埋められる形となつてしまったのだ。

すぐに婚約を結んでしまわないとオデットを他の男に奪われてしまうとロイが国王に泣きつき、

異例の早さで婚約が結ばれたのはおよそ一年ほど前のこと。

どう足掻いても決められた運命から逃れることはできないのだと、投げやりな気持ちでオデットは式までの期間を過ごしていたのだ。

「可哀そうなオデット。そんなに怯えた顔をして……だが君が私を待たせすぎたのが悪いんだ」

ロイはオデットを見下ろしながらそう言った。

「待たせる？ 何をおっしゃって……」

「私があれば君のことを求めてやったというのに。わかるかい？ 私に求められるということは、この国の女性たちにとって何よりも誉れ高いことなんだ。それを君は……」

「私は決してそのようなつもりはっ」

婚約を結んでからというもの、ロイは執拗に体の繋がりを求めるようになった。

結婚前に相性を確認しておくのは重要なことであり、事前に改善点を見つけることができるため有意義であると、もともとらしい理由をつけて。

だがオデットがその要求を受け入れることはなかった。

ただでさえこちらの意見を無視して結ばれた婚約で、そのうえ自分の体までロイの好きなようにされてはたまるかという、意地のようなものがあつたのかもしれない。

しかし今の彼の発言を耳にするに、きつとそんなオデットの身持ちの堅さに彼はずっと不満を抱いていたのだろう。

「用心深い君は私の部屋に来ることを拒んだ。だが出された紅茶を口にすることは厭わなかった」

「え……まさか……」

「紅茶に眠り薬を忍ばせておいたんだが……気づかなかったようだね。少し荒業かとも思ったけれど、そうでもないかと君はここに来てはくれないだろう？」

彼の言葉にオデットは呆然とした。

いくら素行に問題があると噂されているロイでも、まさかそのような卑怯な手を使うとは思っていなかったのだ。

どうやら自分は彼のことを買い被りすぎていたらしい。

——ロイ様は、私を辱めるつもりなのね。

彼からしてみればさぞ光栄なことなのかもしれないが、オデットにとっては慰み者にされるも同然のこと。耐えがたい屈辱である。

あの時ロイの自室への誘いを断った後、目の前に出された紅茶を一口含んだことをオデットは思い出した。

そばに侍従たちが控えていたため安全であると勘違いした、過去の自分を呪ってやりたいときえ思ってしまう。

「ここは私の家だ。仕えている者たちも私の命令には逆らえない」

この国を統治する一族の発言とは思えない身勝手な台詞に、オデットは気が遠くなりそうだった。「おやめください！ このようなことは許されません」

そんな抵抗も虚しく、ロイは息を荒げながらオデットの豊かな膨らみを揉みしだき始める。

その行為になんとか抗おうとするものの、眠り薬のせいで未だに体に痺れが残っており、思うように手足を動かすことができないのだ。

やがて無理やりドレスの胸元をずり下ろされ、その豊かな膨らみがふると露わになってしまった。

オデットは動揺していた。

自分の純潔はこのような形で奪われてしまうのかと。

最初で最後の相手がロイになってしまいうという事は覚悟していたが、せめて初めての契りは初夜に夫婦の寝室でおこないたかった。

そんな僅かな望みさえも尊重されることはないのだと、オデットは絶望したのだ。

しかしこは国王一家の居城であり、先ほどロイも話していた通り部屋の外で控えている者たちは皆彼の息がかかった者だろう。

オデットの味方など誰一人として存在しないのだ。

それにもしも運よくこの場から逃げ出すことができたところで、実家のハリス侯爵家が王家からお咎めを受けるであろうということも目に見えている。

ロイの父であるカシルミアの国王は決して愚王ではない。

だが息子の悪行に対して見て見ぬふりをしているのか、特にこれまでロイが何かを咎められている様子もなかった。

そのため今回の件でも国王に期待はできないのだということばかりきつている。

——もう覚悟を決めるしかないのね……

オデットは観念し、抵抗する体の力を抜こうとした。まさにその時である。

「な、なんだこれは!？」

部屋中にロイの大声が響き渡った。

オデットが驚き彼の方を見上げると、なぜか手を胸元に置いたまま顔を顰めていたではないか。

その表情はまるで、汚いものを見たかのような嫌悪感にあふれていた。

「……ロイ様？ どうなさつ……」

「君のこの痣はなんだ!? いつからこのような！ まさか私と婚約する前からあったのか!？」

問いかけに被せるようにして怒声が響く。

だがオデットは華奢な見た目に反して、このようなことで怯んだりするような令嬢ではなかった。

ロイは気に入らないことがあるとすぐに大声を出して喚き散らす。

婚約してからというもの、それを何度もそばで目の当たりにしてきたのだから。

「……はい。この痣は生まれ持ったものでございます。隠すつもりはございませんでしたが、ロイ様を驚かせるような真似を……申し訳ございません」

ロイの言う通り、オデットの左胸の辺りには生まれつき子どもの拳ほどの痣がある。

膨らみの先端から少し外れた場所に位置するそれは薄紫色で、見方によっては薔薇の花のようにも見えるだろうか。

普段はドレスで完全に覆われている場所のため、オデットに加え身の回りの世話をする侍女以外

はほとんど目にすることはない。

だからロイも知ることはなかったのだろう。

「このように醜い痣を隠し持ちながら、この私と結婚するつもりだったのか？ そんな卑怯な女が、王族の一員になれるとでも!?」

早く醜いその痣を隠せとでもいうように、ロイがこちらに向けて掛け物を投げつけてきた。

自分が無理やりドレスを脱がせようとしたくせに、ひどい言い草だ。

屈辱的なその行為にオデットは下唇を噛みながらも、乱れたドレスの胸元を黙ったまま整える。

「恐れながら……それほどまでに醜いものであると思っていまませんでしたので」

これは本心だった。生まれてこの方、特に違和感を覚えることなくこの痣とともに育ってきたのだ。

「そのような不吉な痣を持つ者など、見たことがない。第二王妃にはふさわしくないだろう!」

ロイがそう言つて軽蔑の眼差しを送る。

だがオデットは内心そんな彼を憐れんでいた。

なぜならば、自分が持つ痣は不吉な痣どころか「幸福の証」であるからだ。

ハリス侯爵家の血を引く女性の中に、稀にこうした痣を持つて生まれてくる者がいるそうだ。

確かに見る者によつては、先ほどのロイのように嫌悪を示されることもあるかもしれない。

だがこの痣は幸せをもたらす証であると代々語り継がれており、実際こうした女性を妻として迎えた一族は末永く繁栄し続けているのだとか。

ではその事実を、目の前にいるロイに伝えればいいのではないか？

そう思われるかもしれないが、オデットにその気はなかった。

ロイのような男にこの痣の真実が伝われば、その効果を悪用される未来が待ち受けているのはわかりきったことだ。

彼に限った話ではない。私利私欲のためにオデットを利用するような男とは結婚させたくないと心配した両親により、結婚式を終えて初夜を迎える日までその痣がもたらす恩恵について明かしてはならないと、幼少期より言い聞かせられてきたのだ。

オデットは両親からの言いつけを忠実に守りこまできたが、無情にもロイのような男と結婚させられることとなってしまった。

婚約の話が舞い込んできた時の両親の悲痛な表情を今でも覚えている。

「こんなことになるなら、最初から君ではなくロゼッタと婚約しておくべきだったな」

「ロゼッタ、ですって？ ロゼッタとは、私の妹のことの間違いありませんか？」

「ああ、その通りだ」

ロゼッタは、一つ年の離れたオデットの妹だ。

オデットほどの美貌は持ち合わせていないものの、可愛らしい見た目と、何より愛嬌があるため舞踏会でも男性から声をかけられることが多かった。

だがロゼッタとロイはそこまで親しい間柄ではなかったはず。

確か婚約時に両家で顔合わせをおこなった際に、会話を交わしたきりではなかっただろうか？

そんなオデットの予想は、次にロイから発せられた言葉によって大きく裏切られることとなる。「彼女にはこのような痣は存在していなかった！ 確かにこの目で確認したからな、私が保証しよう」

「なんですって!?」

ロイの驚きの発言に、今度はオデットの口から大きな声が出た。

ハッとして慌てて口元に手をやり誤魔化すが、動揺を隠しきれない。

この場所にある痣の有無を確認するためには、ドレスの胸元を大きくはだけさせるしかないのだ。つまり彼らは……

「本当は君に話さないまま結婚式に臨むつもりでいたが、こうなった以上は仕方がない。私とロゼッタは、つまり……そういう関係だ」

オデットに気を遣ったのか、ロイは決定的な言葉を濁した。

だがもうそんなものがなくとも、彼らの関係がどのようなものであったのかは一目瞭然だ。

ロイとロゼッタは男女の関係にあったのだろう。

しかもドレスの下に隠された痣の有無を知ることができるほどには、親密な関係であったということになる。

「まあ……なんてことでしょう」

悲しいだとかショックだとか、そんな感情は今のオデットには湧いていない。

元からロイに対して嫌悪感があったが、恋情など抱いたことはなかったからだ。

だが実の妹と自分の婚約者が情を交わしていたという事実は、オデットに少なからず衝撃を与えた。

「君の方がロゼッタよりも遥かに美しい。だから私の妻になるのはオデットで決まりだった。だが君は身持ちが堅く、結婚まで指一本触れさせてはくれなかっただろう？」

「それで、ロゼッタと……？」

「ああ。彼女をその気にさせるのは簡単だった。むしろ向こうの方が積極的だったくらいだ」

その光景が簡単に想像できてしまい、オデットは思わず眉間に皺を寄せる。

ロゼッタはよく言えば愛嬌があり、社交的な令嬢だ。

だがそれと同時に、男性に対する彼女の思わせぶりな態度がたびたびハリス侯爵家の中で問題となっていたのだ。婚約者のいる男性に対してもお構いなしの態度のせいで、相手の令嬢の一族が苦情を申し入れてきたこともあった。そのたびに父であるハリス侯爵が謝罪に走り、ロゼッタをきつく叱りつけていたはずなのだが……

——恐らくこの件に関しては、ロイ様のおっしゃることが本当のようね。

ハリス侯爵もロゼッタの行いには頭を悩ませており、オデットの婚姻が成立次第しかるべき貴族のもとへ早急に嫁がせると話していた。

「もちろんロゼッタとの関係は、君と結婚するまでの期間限定のつもりだったんだよ」

「何をおっしゃっているのか私にはわかりません。第二王子殿下のなさるようなことではありませんわ！」

未婚の令嬢に手を出した挙句、期間限定であつたなどと言い始めたロイのあまりの愚かさに開いた口が塞がらない。

こんな自分勝手な振る舞いが許されてはならないのだ。

「なんと言われようと構わない。私に隠し事をしていたのは君だつて同じだろう？ それに君の隠し事の方がよほど悪質だ。それではとても第二王子妃には……」

自分のしでかしたことを棚に上げて、ロイはまるでこちらの方に原因があるともいうような物言いだ。

だがここで、オデットの中にとある期待が生まれた。

「……では、私はロイ様の婚約者にはふさわしくない？」

これを機にロイと婚約破棄ができるのではないかと思つたのだ。

——私から言い出すことはできなかったけれど、ロイ様から婚約破棄を提案してくだされば……オデットよりも立場が上であるロイの希望ということならば、すんなりと婚約破棄を認めてもらえるはずだ。

しかしそれと同時に不安も浮かび上がる。

オデットが痣持ちであることが婚約破棄の原因だと社交界中に知られてしまったら、次の結婚相手を探すことが難しくなってしまうかもしれない。

これまでのロイとのあれこれで、オデットはこのまま誰とも結婚しなくてもいいと思い始めていた。だがハリス侯爵家の立場を考えたらそうはいかないだろう。

未婚の娘がいつまでも居座っているようでは、侯爵家の体面が保てない。

ロイはオデットの問いかけに対し、申し訳なさそうな顔で頷いた。

「ああ、申し訳ないがそういうことになる」

「となると、私たちの婚約は……」

「とても言いづらいことだが……オデット・ハリス侯爵令嬢、君との婚約は破棄させてもらおう」

その言葉の割に、ロイは晴れ晴れとした表情を浮かべていて嬉しそうだ。

安堵とこれから先への不安とが入り乱れた複雑な感情が、一度にオデットへと襲いかかった。

とはいえロイにそう断言されてしまえば、こちらにそれを拒否する権利などないのだ。

「……婚約破棄の件、承知いたしました」

「君のその痣のことは絶対に他言しないと約束しよう。婚約破棄の理由は性格の不一致ということかどうか？」

どうやらさすがのロイも、僅かながら良心というものは持ち合わせていたらしい。

オデットが頼む前に痣のことは口外しないと言いつ出した。

「性格の不一致……でございますか」

性格に難があるのは向こうの方であるのに、なぜか連帯責任のような形となったことに納得がないが、下手な噂を流されるよりはましだと思ふことにする。

もはや何かを言い返す気にはなれなかったオデットは、そんなロイの言葉に対して苦笑いを浮かべることしかできなかった。

第一章 狂犬公爵に嫁ぎます

ロイから突然の婚約破棄を言い渡されてから一週間後、オデットの姿は再び城にあった。ただし今日はロイの自室ではなく応接間だ。

そして今回の訪問はオデットが自ら希望して実現したものである。

あれから婚約破棄を進める方向で話はまとまり、現在は署名する証書の完成を待っている段階だ。「君の方から私と会いたいだなんて……珍しいものだね。婚約破棄が決まったから私のことが恋しくなったのかい？　だが申し訳ない、君とはもう……」

「婚約破棄をお受けする代わりに、私の新しい婚約者を探すのを手伝っていただけませんか？」
「は？」

どうやらロイはオデットが城へとやってきた理由を、自分に都合のいいように解釈していたようだ。未だ彼に思いを寄せており、未練がましくやってきたのだろうと……

しかしもちろんオデットにそんな思いは毛頭なく、ロイの愚かな台詞を途中で遮断する。

第一、前回の件で彼への信用は地に落ちたのだ。

万が一のことを考えて今日は侯爵家から護衛を連れてきており、先ほど出された紅茶にも一切口をつける気はなかった。

「今回の婚約破棄は殿下からの一方的なもの。その見返りとして、私に新しい男性を紹介していただきたいのです」

「そ、それが今日城へやってきた理由なのか？」

「はい。むしろそれ以外に理由がございますか？」

きつぱりとそう告げたオデットに、ロイは面食らった様子だ。

あんぐりと口を開けたまましばらく動けないでいる。

「その、なぜ呼び名が変わったんだ？　以前は名前で呼んでいただろう？　殿下だなんて他人行儀な……」

「私たちはもう婚約者の間柄ではございません。名前をお呼びするのは失礼では？」

ロイの情けない問いかけに対し、オデットは首を傾げた。

その反応を目にした彼は、うっと気まずそうな表情を浮かべている。

「……私がそのようなことをせずとも、君の美しさならば新しい相手くらいきつとすぐに見つかるだろう？」

「第二王子殿下に婚約破棄された令嬢など、社交界では針の筵むしろです。こちらから新しい婚約者の方など探せるはずありません。父も頭を悩ませておりました」

「ううん……」

再び言葉に詰まるロイに対し、オデットはさらに畳みかけるように言葉を続けた。

「ハリス侯爵家は突然の婚約破棄と新たな婚約の打診で、非常に困惑しております。それについて

の責任を殿下は果たされるべきなのは？」

姉は婚約破棄、妹は突然第二王子の婚約者候補だ。

しかもロゼッタの頭があまりよくないことは侯爵家の中では知られた話である。

それをひた隠しにして誤魔化すために、姉妹を舞踏会で並ばせるような真似はしてこなかった。オデットと並べばその差は歴然で、ロゼッタの嫁の貰い手がなくなると両親は思ったのだろう。

だが今となつてはその対応の甘さを、父であるハリス侯爵は後悔しているのだと聞いている。

『もつと早くに、ロゼッタとしかるべき貴族との縁談をまとめておくべきだった』

これはロゼッタのもとへ王家からの婚約の打診が届いて以来、ハリス侯爵が何度もオデットや母の前でこぼしている台詞だ。

ロゼッタに第二王子妃の役割が務まるはずはなく、しかも相手はあのロイである。

彼女に彼の愚行を受け入れて正すだけの器があるのだろうか？ ……恐らくないだろう。

侯爵自身も娘の性格をよく理解していたため、できるだけ嫁ぎ先で苦勞せずに済むよう家格の低い子爵家や男爵家で相手を探していたようだ。

だが今回のロイの決断により、そうした侯爵家側の努力は全て無駄になってしまったと言っても過言ではない。

ちなみに張本人のロゼッタはというと、いつも自分より優秀で引け目を感じていた姉から婚約者を奪い取ったということで、どうやら優越感に浸っているようだ。

決して姉妹の仲は悪くなかったと思っていたが、もしかしたらロゼッタの中では違ったのかもし

れない。

血を分けた妹ならば、愚鈍な第二王子との結婚をなんとしても阻止すべく姉として働きかけるのが当然のことだろう。だがロイから数々の暴言を浴びて心が疲弊していた今のオデットには、もうそんな良心は残っていなかった。

彼の話によれば、すでに彼らは体を繋げたというではないか。

つまりロゼッタは未婚の状態で純潔を失ってしまったことになる。

経験済みの貴族令嬢が嫁ぎ先を探すのは困難を極め、見つかったとしても相手は後妻を求める年老いた男性や、性格に難があるなどの訳ありの貴族に限られてしまうだろう。

ロイはしばらく無言のままだったが、やがて難しそうな顔をしながら頷いた。

「うむ……その件に関しては私にも責任はある」

「そう思っていたけると助かりますわ」

「仕方ない。君の言う通り、新しい婚約者を探すのを手伝わせてもらおう」

全責任はロイにあるはずなのだが……とオデットは思いながらも、その考えを口にするような愚かな真似はしなかった。

彼は目の前のテーブルに置かれたティーカップに手を伸ばすと、優雅な所作でそれを口に運ぶ。つられるようにしてオデットも紅茶を口に含もうとしたが、すんでのところでその行為を思いとどまった。

——危なかったわ。さすがに痣を見られた後だから大丈夫だとは思うけれど、もうロイ殿下に信

用はないもの。

またいつかのように得体のしれない薬を混ぜている可能性もなくはない。

オデットの中でそれほどまでにロイへの信用は失墜していたのである。

「そうだ！ 君にうってつけの男がいる」

ロイは少し考え込むような仕草を見せた後、ひらめいたように手を叩くと自信満々の表情でこちらに頷きかけてきた。

彼自身に問題はあれど、一応は第二王子である。

その交友関係は幅広いはずだとオデットは踏んでいるのだ。

「家柄もよく武力に優れ、何より初婚だ。年齢は君より五つほど上だが、その程度の歳の差など、大した問題にはならないだろう」

「そのお話だけを聞いておりますと、これ以上ないほどに素敵なお方ですけれど……」

あまりにうまい話に、オデットの中で疑問が浮かぶ。

なぜそれほど好条件の男性が、未だ婚約者もおらずに独身でいるのかと……

「これまで一度もご結婚されていないのには、何かわけがあるのですか？」

オデットの五つ年上ということは、相手は二十四歳ということになる。

家柄もよく武力に秀でている若者ならば、とうの昔に婚約者の一人くらい決まっていってもおかしくはない。むしろこの年齢まで独り身を貫いているという方がおかしいのだ。

——よほど選り好みをされているのかしら。それともかなり捻くれた性格の持ち主だったりし

て……

見た目や家柄にこだわりはない。だが性格に難がある男性だけはもう懲り懲りだ。

ロイはそんなオデットの問いに対して、ニヤリと意地の悪そうな笑みを返してくる。

「相手はグランドル公爵だ。カイル・グランドル公爵……カシルミアきつての高位貴族だ」

「グランドル公爵……」

その名は確かに耳にしたことがあった。

グランドル公爵家といえば国内に屋敷をいくつも所有しており、治めている領地も広大であると聞いたことがある。

そしてその当主であるカイルは騎士団長を務めているということも周知の事実だ。

「君も聞いたことがあるだろう？ 狂犬公爵だ」

「狂犬公爵、ですか？ 言われてみれば……」

カイルはどうやら華やかな場所が苦手なようで、舞踏会に参加している姿をオデットは見たことがない。

そのため彼の容姿についても何も知識は持ち合わせていなかった。

だがロイが告げた「狂犬公爵」というあだ名だけは聞いたことがある。

——確か舞踏会で、偶然噂話を耳にしたんだわ。

隣国との国境で争いが起き、騎士団長を務めるカイルがその制圧を任されたらしい。

かなり熾烈な争いであつたようだが、彼は敵の兵士を皆殺しにして血まみれの姿で帰還したと、

令嬢たちが噂していたのだ。

その口調は敬意を抱くようなものではなく、むしろ恐れているかのようなものであったことをオデットは鮮明に思い出した。

「なぜあいつが狂犬公爵と呼ばれているか、オデットは知っているかい？」

「いいえ……ですが騎士団長としてその成果を挙げられているからでは？」

オデットは先ほどの記憶をもとに、当たり障りのない返答をした。

「そうか。君はあいつと直接顔を合わせたことがなかったか……」

ロイが憐れむような目で首を横に振っている。

「何をおっしゃりたいのですか」

「正直に話そう。だが驚かないでくれ」

そして彼は神妙そうな、とはいえどこか面白いような口ぶりでその真相を明かしてくれたのだ。「グランドール公爵の目つきは鋭く、常に不機嫌で笑った顔など見たことがない。そして女性からすると見上げるような大きな体に、簡単に人を捻り潰してしまいそうな強い力。極めつけは全身に刻まれている傷跡だ。だから皆から恐れられ、つけられたあだ名が狂犬公爵なのだ」

「そう、なのですね……」

「隣国との戦いから帰還したあいつの姿を見ていたならば、きっとオデットも気絶していたはずだ。血に濡れた恐ろしい出で立ちといったら……私にはとてもではないが真似できないね」

その口ぶりからすると、ロイはカイルのことを嫌っているのだろう。

だがオデットにとつて、先ほどロイが挙げた理由など取るに足りないものであった。

確かに結婚するにあたって常に不機嫌でいられるのは少し困る。

しかしカイルは騎士団長であり、その威厳が崩れてしまうのはカシルミアにとつてもいいことはないはずだ。ある程度迫力のある風貌が必要不可欠だろう。

オデットが結婚相手となる男性に求めることはただ一つ。

自分のことを妻として尊重してくれること、それだけだ。

たとえ屋敷の外に恋人がいても構わない。貴族の結婚は政略的なものが主であるということはオデットも理解しているし、そのことに関してとやかく言うつもりはなかった。

だが他の女性にうつつを抜かすあまり、正妻である自分のことを蔑ろにするような真似は到底見過ごすことはできないだろう。

「私は見た目については気にしておりません。私のことを大切にしてください方でしたら、それだけで十分ですわ」

伏し目がちにそう告げると、またもロイは意外そうな顔をする。

きつとオデットはカイルとの結婚を嫌がると思っていたに違いない。

「そ、そうか。まあ君も見えた目は美しいとはいえ痣持ちだ。普通の男との縁談は難しいだろう。痣持ちと狂犬公爵で、せいぜいお似合いだ」

予想外のオデットの反応が、恐らくロイの中では面白くなかったのだ。

彼はどこことなく悔しそうな表情をにじませながら、意地悪な台詞をオデットにぶつける。

——この痣が幸福をもたらすということを、ロイ殿下にお伝えしていなくて本当によかった。オデットは心からそう思った。

彼が生涯この痣の恩恵を受け続けるのは、自分にとってもハリス侯爵家にとっても本望ではないからだ。

「ではグランドル公爵との婚約の話を進めるということでもいいんだな？」

ロイの言葉でハッと意識を取り戻したオデットは、しっかりと頷いた。

「はい。ぜひよろしく願います」

「ならば近々グランドルの屋敷へ遣いを出そう。私ができるのはここまでだ。あとは当人同士でなんとかしてくれ」

顔合わせの場に立ち会う気のないロイであるが、むしろオデットはその発言に安堵していた。

彼がいると余計な誤解が生まれ、事態がややこしいことになりかねない。

カイルと二人だけの方が効率よく物事が進むことだろう。

こうしてオデットは、狂犬公爵と名高いグランドル公爵と顔合わせをおこなうこととなったのである。

◇◇◇

——想像していたよりもずっと素敵なお屋敷だわ。狂犬公爵のお屋敷だというから、どれほど恐

ろしい館なのかと思っていたけれど……

ロイとの面会から一週間後、オデットの姿はグランドル公爵邸の一室にあった。

あれから約束通り公爵家に婚約を打診する便りを送ってくれたようなのだが、当初は断る旨の返事が送られてきたらしい。

詳細な理由はわからない。

だがそれをどうしても、と頼み込む形で半ば無理やり進めてもらったのだ。

もちろん嫌がる公爵のもとに、無理やり押しかけて婚約を結んでもらうつもりはない。

だが顔を合わせて言葉を交わさなければ、互いのことは何一つわからないだろう。

父であるハリス侯爵とともに公爵邸を訪れたオデットは、応接間へと案内されてソファに腰掛けられている。隣に座る父はカイルの姿を実際に目にしてその評判を耳にしているため、心なしか緊張しているように見えた。

だが父は決してそのようなことを口にはしない。

娘の不安を煽るようなことはしたくなかったのだろう。

オデットはそんな父の姿を横目に、応接間までの通り道で目にした屋敷の様子を思い出していた。立派な入り口の門は両脇を真っ白な薔薇の花が覆い尽くしており、まるで花のアーチのようで華やかだった。屋敷の中も暗く殺風景なものを想像していたが、実際にあったのは来賓を出迎える美しい花が生けられた花瓶に、廊下に飾られた数えきれないほどの絵画たち。

そして繊細なレースのカーテンに、小花柄の壁紙が屋敷の中を明るく彩っている。

これらはオデットがこれまでに抱いていたカイルへの印象を、いい意味で大きく揺るがしていた。やがてオデットたちが応接間へと案内されてから十分ほど経っただろうか。

扉が軽く叩かれてゆっくりと開くと、大柄な男性が部屋の中へと足を踏み入れてくる。オデットは父とともに慌てて立ち上がり、深く頭を下げて彼を出迎えた。

「待たせてしまい、すまなかった。そのように堅苦しい真似はせずに頭を上げてほしい」

頭上から響く声は太く威厳のあるものだったが、オデットはむしろそれを好ましいと思った。彼に言われた通りに頭を上げると、こちらをじっと見つめる男性と目が合う。

その姿をしっかりと目に焼き付けるために、同じように彼の方へと真っ直ぐ視線を注ぐ。

——この方が、グランドール公爵……カイル様なのね。

カイルの背はかなり高く、完全にオデットを見下ろすような形となっている。

そして筋肉で覆われた体はまさに騎士団長にふさわしいものだろう。

今日は紺色のジャケットを羽織っているため、全身に刻まれた傷跡というのはわからなかったが、それ以外はあまりに普通の男性であつたため拍子抜けしてしまった。

漆黒の髪は全体的に短く、前髪だけ長めに伸ばされているようだ。

そして涼しい目元が印象的な碧眼は、角度によっては澄んだ海のようにも見えて美しい。

——確かに体は大きくて、お顔も厳しい表情をされているけれど……

目つきは確かに鋭いが、オデットにとって不快なものではなかった。

ロイの時に感じたような卑しい欲を、その視線から感じるものがなかったからだろうか。

「はじめまして、グランドール公爵様。こちらが娘のオデットでございます」

父の紹介に合わせて、オデットは再び頭を下げる。

じつとこちらに視線が降り注がれているのがわかり、思わず全身に力が入った。

「……わざわざ来てもらったところすまないが、この話はなかったことにしてほしい」

「えっ？」

カイルから告げられた台詞に、オデットは驚いて思わず頭を上げた。

そして口からは戸惑いの声が漏れてしまう。

「あつ……申し訳ございません。ですが今日お話しできるのを楽しみにしておりましたので……」

「楽しみ？ 俺と話すのを？」

頭上から訝しげな声が降ってくる。

オデットが頭を下げていなくとも、その体格差でそうなってしまうのだ。

「はい。公爵様とは一度もお顔を合わせたことがございませんので、どのようなお方なのかと胸を躍らせておりました」

これは嘘偽りのないオデットの本心だった。

狂犬公爵と呼ばれ国中の貴族たちから恐れられているカイルは、一体どのような人物なのかと気になっていたのだ。

その胸の高鳴りは、実際に公爵家の屋敷へと足を踏み入れたことでさらに大きくなった。

思い描いていた公爵像とは大きくかけ離れた屋敷の雰囲気、カイルという人の奥深さを感じ

取ったのである。

「……俺はこの通り、狂犬公爵と呼ばれ皆に恐れられている。そのような面白みのある男ではない」

言葉ではそう言っているものの、カイルの顔には明らかに動揺の色が浮かんでいた。

これまでの人生で恐れられることはあっても、会話してみたいと言われたことなどなかったのだろう。

「私は未来の旦那様に面白さは求めておりません。ともに寄り添い、夫婦として領地を盛り上げていけるような、そんなお相手を探しているのです」

「だが……」

「お願いです。ほんの少しで構いませんから、お時間をいただけないでしょうか？」

必死の訴えにカイルはしばらく黙ったままその場に立ち尽くしていたが、やがてため息をついてオデットの方を見つめた。

「……そこまで言うのなら、少し話をしよう。だが婚約の件は……」

「それも、お話ししてから決めてくださいませ」

「ううむ……」

強気のおデットに対し、カイルはたじたじだ。

強靱な体躯の持ち主が華奢なおデットに振り回されているようにも見え、なんとも奇妙な光景である。

やがてハリス侯爵は気を利かせて退室し、公爵家の使用人たちもカイルの指示で下がることになった。

『決してオデット嬢に不埒な真似はしないと誓う』

あまりに真剣な面持ちで皆にそう宣言したカイルの姿に、オデットはくすりと笑ってしまいそうになった。

——なんて可愛らしいお方なのかしら。

この短時間でもカイルの様子をずっと見ていれば、彼がそんなことをする男ではないことくらいわかつている。

その真っ直ぐな瞳には、穢れ一つ存在していないように見えた。

きっと彼は自分のような男と二人きりになってしまうオデットを安心させたかったのだろう。

カイルの不器用な優しさが手に取るようにわかり、オデットの中で「狂犬公爵」という呼び名はすっかり息を潜めてしまったのである。

「……それで、君は俺と何を話したいのか」

向かい合うようにしてソファに腰掛けたカイルは、低い声でそう尋ねてきた。

ふわふわで柔らかなソファが彼の重みで深く沈んでいる様子を眺めながら、オデットは頭の中でずっと考えていたことを彼にぶつけてみる。

「その……失礼な問いでしたらお答えにならなくても構いません。なぜグランドール公爵様は、狂犬公爵様と呼ばれるようになったのですか？」

「名前で呼んでもらって構わない。グランドル公爵では誰のことを言っているのかわからなくなる」

「ですがそれでは失礼に」

「構わない」

ぴしやり、とそう告げられたオデットは、素直にその指示に従うことにする。

「ではカイル様」

そう呼びかけると、彼は満足そうに頷きを返してくれた。

「カイル様はなぜ狂犬公爵と呼ばれるようになったのですか？ 戦いで勝利したならばむしろ喜ばしいことですし、騎士団長としての役割を果たされただけのこと。忌み嫌われるような筋合いはございません」

ロイから話を聞かされて以来、その問いがずっとオデットの頭を支配していたのだ。

騎士団長は誉れ高い職業であり、貴族の男性たちの中ではむしろ憧れの存在と言っても過言ではないはず。

そしてその職務は国の安全を守ること。

そのために必要とあらば敵方の命を奪うことは至極当然の行動だろう。

だというのにカイルはその行為ゆえに血に濡れた公爵と蔑まれ、国中の貴族たちから恐れられている。オデットにはそれがどうしても腑に落ちなかったのだ。

カイルはその問いを耳にすると、眉間に皺を寄せて唸り始めた。

答えづらい質問だったのだろうか？

「あの、お答えしづらいようでしたら結構で……」

そう切り出したオデットの発言を、カイルの太い声が遮った。

「いや、そういうわけではない。正直に話していいものかどうか迷っただけだ。君は、その……元はと言えば第二王子殿下の婚約者だろう」

「つまりはロイ殿下に原因があるか？」

「ううむ……」

またもやカイルが唸り声を上げるが、オデットも容赦はしない。

「私は何を言われても大丈夫です。婚約破棄できてよかったとさえ思っておりますし、王族の一員となれなかったことに未練など一切ございませんから。……ロイ殿下が原因なのですね？」

オデットの中でなんとなくの予想はついていた。

あの時のロイのカイルへの態度といたら……彼らの間に何かがあったと考えるのが普通だろう。あまりに直球な質問にカイルは一瞬肩を揺らしたものの、覚悟を決めたのかようやく事の真相を話してくれることとなったのである。

「ロイ殿下とは互いの親が親しかったこともあり、幼い頃から顔見知りのような関係であった。だがどうやらあの方は俺のことが嫌いらしい」

「何か嫌われてしまうようなことを？」

「いや、思い当たる節はない。だが事あるごとに俺のやることなすことの邪魔をしてくるというか、なんというか……いや、第二王子殿下に対して言っていないことではないな。今の話は忘れて……」

「いいえ、最後までお話ししてください」

途中で怯んでしまったカイルを奮い立たせるかのように、オデットがそう急かす。

どうせこちらはすでにロイから嫌われている身なのだ。

これ以上彼からどう思われようと、知ったことではなかった。

それにここは公爵家の屋敷であり、王城とは違って聞き耳を立てているような不届き者もいないだろう。

オデットの剣幕に圧倒された様子のカイルは、大きな体を縮めながら言葉を続ける。

「三年前に起きた隣国アルカロスとの争いを知っているか？　かなり悲惨な状況で、騎士団から大勢の怪我人も出てしまった」

これは先日ロイが話していたことだろう。確かにそのような話を耳にしたことはあったが、貴族の娘であるオデットはそれ以上の詳細を知ることにはなかった。

「お話だけは耳にしたことがあります。ですがそれがこのお話と何の関係が？」

「あの争いは、本来ならばあっさりと簡単に片付くようなものだった。カシルミアの兵士の数は敵方を遙かに上回る予想で、戦力は十分なはずだったんだ」

「えっ？」

予想もしていなかった言葉に、オデットは気の抜けた声を出してしまう。

「そう、のですか……？」

「ああ。だから当初はロイ殿下も出征されるはずだった」

「ロイ殿下が!?」

カイルの告げた言葉が信じられずに、思わずソファから立ち上がりそうになった。

「国王陛下はロイ殿下に王族としての自覚を持っていたかかったんだ。将来王太子殿下が即位されたならば、あの方がともに国政を支えることになるだろう。その前に我が国が抱えている問題や戦争の過酷さを、身をもって実感してほしかったのだとおっしゃっていた」

正直国王は息子であるロイのことを買い被りすぎだと、以前からオデットは思っていた。

あの意気地のない第二王子に出征などできるはずもなく、カシルミアにとってもよくない結果をもたらすだろうということは目に見えている。

「ですがロイ殿下は……」

恐らく出征などしていないはずだ。

彼との婚約話が持ち上がってから今日までの間に、そんな話を耳にしたことはなかった。

きっとロイのことだから、出征していたならば自慢げに当時の話をしてきただろう。

「出征と言っても、ロイ殿下が前線に出て万が一命を落とされるようなことがあつてはならない。

あくまで指示役という形で、実際に敵の兵士たちと戦うのは俺をはじめとする騎士団の面々と、ロイ殿下が抱えている兵士たちの予定だった」

「それは確かにその通りですわ」

「だがあの方はそれすらも拒絶し、直前になってその役割を放棄した。自らの率^{ひき}いる兵士たちとともに城へ逃げ帰ってしまったんだ」

「ええっ!？」

ロイのあまりに無責任な行動に、素っ頓狂な声が出てしまった。
第二王子としてカシルミアの未来を背負う覚悟などまるでないその行動に、元婚約者として申し訳なさと恥ずかしさが募る。

そして彼の方から婚約を破棄してくれたことに、心から感謝しなければならないとさえ思った。
「本当ならば、我が国の圧勝で終わるはずだったんだ。しかし応援の兵士を失い、こちら側の兵数はぐんと減ってしまった。おまけに指示役の第二王子が逃げ帰ったと知れば兵士たちの士気は下がる一方。その隙を敵方に突かれる形となってしまった」

主に見捨てられたと思った兵士たちの気持ちを想像するだけで、オデットは胸が締め付けられそうになった。

「それで……どうなさったのですか？」

カイルは窓の方に視線を向けると、どこか遠くを見つめるようにこう告げたのだ。

「国のために戦う大切な部下たちを危険に晒^{さら}すことがあってはならない。だから俺が指示役の代理を引き受け、先頭を切って部下たちを守るために戦った」

「そんな……」

「俺の傷跡というのはその時にできたものも多い。必死に戦い勝利を収めたが、やはり犠牲も多く

伴った。辛い死者は出さずに済んだものの、後遺症の残るひどい怪我を負った者もいたんだ。俺は大切な部下たちを守ることができずに……」

最後の方は声が尻すばみになりはつきりとはわからなかったが、「騎士団長として失格だ」と言っているようにも聞こえた。

「そのような、カイル様は何も……」

何も悪くない、そう言いかけたが口を閉じた。

その場になかった自分がカイルにかけるにふさわしい言葉ではないと考えたからだ。

「帰還した時に血まみれだったというのは、あながち間違いない。負傷した者たちの怪我の手当でも担^{にな}っていたからな。戦地で身なりを整えている余裕などないだろう?」

「それではあなた様の噂話は、全てでたらめではありませんか。それも全てはロイ殿下のせいだというのに、あの方はなんて失礼なことを!」

ロイがカイルのことについて話していた時の態度を思い出し、オデットは怒りで震えそうになる。
「いや、いいんだ」

だがカイルがそれ以上この件について何も話そうとはしなかったため、こちらも仕方なく口を閉じるしかなかった。

——カイル様は、ロイ殿下のことをどう思われているのかしら……

どうやらカイルはあまり自分のことを話す男ではないようで、彼が何を考えているのかオデットにはわからなかった。

「話が逸れてしまったが」

気まずい空気になりかけたところで、カイルが仕切り直すかのように咳払いをする。

「まあ話をまとめると、俺は君に似合う男ではない。ロイ殿下が何を考えてこの婚約話を持ってきたのかわからないが……今回の件はなかったことにしてほしい。申し訳ない」

そう言って深々と頭を下げられてしまった。

オデットからしてみれば、なぜ彼がこれほど頑なに結婚を拒んでいるのかわからないのだ。

体の傷跡は彼自身に非があるわけでもなく、こうして話している様子から、凶暴な性格を隠しているようにも思えない。

家柄もよく、騎士団長としてカシルミアのことを全力で守ろうと努力している。

むしろ結婚相手としては引く手数多なのではないか。

——もしかしたらカイル様は、私のことがお気に召さないのかしら？

オデットのことを傷つけないために、あえてカイルは自らのことを卑下しているのではないかとさえ思えてくる。

一応は第二王子の婚約者として、恥ずかしい見た目ではないように努力してきたつもりだ。

だがカイルは公爵であり、もつと素晴らしい女性を求めているも何らおかしいことはない。

それに考えてみれば、自分は幸福の証とはいえ痣持ちだ。

ロイに指摘されるまで、これほど痣が結婚に影響を及ぼすようなものだとは思えもしなかった。

世の中にはロイのように、女性に対して高い理想を持つ男性も少なからず存在するのだろう。

カイルが痣の存在を知っているのかはわからなかったが、もうこの婚約話はきっぱり諦めようとオデットは決めた。

「頭をお上げください。私のような者にそのようなことをなさる必要はございません」

オデットの言葉に、おずおずとカイルが頭を上げる。

「カイル様のことを考えもせず、一方的に婚約を迫るような真似をしてしまい申し訳ございませんでした。身の程知らずの行いでしたわ」

「そのようなことはない。君に非はない」

オデットの言葉に対し、カイルがハッとしたように首を横に振った。

だがそれをもっとこちらを氣遣つてのことなのだろう。

彼のことをもつとよく知りたい、ともに過ごす時間を持つてみたいという願いがいつしかオデットの中で膨らみ始めていたことは事実だ。

だが今ならばまだ引き返せる。

カイルとの出会いはなかったこと、そう思つて再び婚約者探しの振り出しに戻るだけだ。

「カイル様は私の痣のことについて、ロイ殿下からお聞きしておりますか？」

もしもカイルがその話を耳にしていなかったとしても、もはや関係ないとオデットは思った。それにカイルならば、痣のことを言いふらしたりするような愚かな真似はしないはずだ。

「……婚約の打診が来た時にロイ殿下が話しておられた。申し訳ない」

「いいえ。私は気にしておりませんから、謝らないでください」

やはりロイは痣のことを言いふらしていたのかと、オデットはため息をつく。

婚約破棄の原因については他言しない、性格の不一致であるということにすると約束したことを忘れたのだろうか。

だからカイルから婚約を断られたのだと、オデットの中で合点がいった。

「だが俺は別に痣のことなど気にしていない。そんなことを言ったら俺だって傷だらけの身。人のことなど言える立場にないだろう？ 婚約の話を断ったのも君の痣のせいではなく、全ては俺自身のせいだ……」

「えっ、そうなのですか？」

てっきり痣が原因だと思い込んでいたオデットの口から、気の抜けた声が出る。

だが彼の言葉に嘘はなさそうだ。

正面のカイルは一瞬だけオデットの方に視線を送った後、両手で頭を抱え込むような仕草を見せた。

「見ての通り俺はこんな見た目で、狂犬公爵と呼ばれて社交界では忌み嫌われている。オデット嬢を潰してしまうほど力も強いだろう」

「私はそのようなことは気にしておりません」

「それに君は……」

「君は……なんですか？」

途中まで何かを言いかけたが口をつぐんでしまったカイルに、オデットは訝しげな視線を送りな

がら尋ねる。

しかし彼はなかなか言葉を発しようとしな

い。それどころか、なぜかみるうちに顔が赤く染まり、もじもじと恥ずかしそうに体を丸めているではないか。

「あの……カイル様？」

「お、オデット嬢はあまりに可憐で美しくて、その……そんな可愛らしい女性が常に隣にいますと気が落ち着かないんだ！」

応接間にカイルの低い声が響き、その反動でしんとした静けさがたちまち二人を包み込んだ。オデットはたった今告げられた台詞が信じられなくて、ばちばちと何度も瞬きを繰り返す。

——今、カイル様が私のことを可愛らしいとおっしゃったような……

「すまない！ 忘れてくれ。俺みたいな男にこのようなことを言われてさぞ不快だろう」

呆然とカイルの方を見つめたままのオデットの様子に、彼はどうやらオデットがショックを受けたのだと勘違いしたようだ。

「オデット嬢に怖い思いはさせたくないし、俺といることで嫌な思いをする場面も多々あるはずだ。貴族の者たちが俺に向ける態度を知っているだろう？ だから……」

「それが、婚約をお断りした本当の理由ですか？」

「え、あ、ああ……」

なんだ、というのが正直なオデットの感想だった。

予想外の返答にふつと体の力が抜けていき、それと同時に心が温かいもので満たされていく。

カイルとなら穏やかな家庭を築くことができる……そんな気がしたのだ。

そしてグランドル公爵家のために、この幸福の瘧の力を使うべきなのではないかと。

「カイル様」

オデットはよく通る澄んだ声で、カイルの名を呼んだ。

「私と結婚してはいただけませんか」

「え、いや、だから今はやめた方がいいと……」

突然告げられた求婚の台詞に、カイルは目を白黒させている。

だがオデットは怯まない。

「私はカイル様のお人柄に惹かれました。狂犬公爵だなんて噂は元々大して気にしていませんでしたが……こうしてお会いしてみても、なんて優しいお方なのだろうかと思いました」

「オデット嬢、しかし……」

こうまで言われても、カイルは不安なのだろう。

それほど彼は社交界で肩身の狭い思いをしてきたということなのかもしれない。

「俺は女性に慣れていないし、気の利いた言葉一つかけてやることもできない。知らないうちに君を傷つけてしまうこともあるかもしれない」

「構いません。カイル様に悪気があつてのことではないと、わかっておりますから。私は大丈夫ですわ。カイル様が思っているほど弱くはないのです」

オデットはそう言つてにつこりと笑う。

ロイにぶつけられた悪意のある言葉の数々を思い返せば、カイルが起こすかもしれない失態などほんの些細なことだろう。オデットは華奢な見た目に反してはつきりと思つたことを伝える性質^{たち}なのだが、ロイとの出来事を乗り越えたことである意味強くなったのかもしれない。

幸せになつてロイを見返してやる、そんな気持ちも芽生え始めていた。

カイルはしばらく戸惑うように瞳を揺らしていたが、やがて覚悟を決めたようにゆつくりと顔を上げた。

「……本当に、その言葉に後悔はないのか」

「後悔など、するはずがありません。むしろ痔持ちで公爵家よりも格下の家の娘である私と、結婚してくださるだけでありがたいお話です」

「そのように自分を卑下する必要はない。ロイ殿下に何か言われたのかもしれないが、気にするな」

——ほら、やはりお優しい。

オデットは思わず微笑んだ。ぶっきらぼうな物言いの中にしっかりと優しさがある。

確かに会話が弾む方ではないのかもしれないが、彼はしっかりとオデットの話にも耳を傾けてくれるのだ。結婚相手として求めているのは、まさにこのような男性であった。

「オデット嬢がそこまで言うのなら、その……まずは婚約を結んでもいいだろうか。結婚はそれから考えよう」

「ありがとうございますカイル様！ これからよろしくお願いします」

「まさかこんなはずでは……」

何やらぶつぶつとカイルが呟いているのが聞こえたが、オデットはそれには触れずにソファから立ち上がる。そして彼に向けて深く頭を下げた。

「それではカイル様、またお会いできる日が楽しみですわ」

その後別室で待機していた父と合流し、二人で乗り込んだ帰りの馬車でのこと。

見送りは結構だと断ったにもかかわらず、カイルは律儀に玄関までやってきた。

その姿を思い出してオデットは再び微笑む。

「グランドール公爵から、婚約を結ぶ方向で話がまとまったと聞いた。本当にお前はそれでいいのか？ 相手はその……狂犬公爵だぞ？」

「ですがお父様。今日カイル様とお会いして、狂犬公爵だとお感じになりましたか？」

オデットとハリス侯爵の前で、カイルは終始丁寧な物腰であっただろう。

公爵という格上の家柄にもかかわらず、偉ぶったような態度は見受けられなかった。

そしてそれはどうやら父も同じように感じていたらしい。

「いいや。確かに今日のあの方はとても礼儀正しかったな。どこぞの王族とは大違いだ」

「もう、お父様ったら」

父の発言が誰のことを指しているのか、オデットにはすぐにわかってしまう。

「カイル様の噂の件には、どうやらロイ殿下が関係しているようです。あの方は無実ですわ。むしろ災難を被ってしまったようなものかと」

それに、とさらにオデットは言葉を続けた。

「カイル様は私の痣のことを知っておられました。ですがそんなものは気にしていないと……そうおっしゃってくださいました。私にはその言葉がとても嬉しかったのです。あの方となら、素敵な家庭を築くことができる気がします」

「そうか」

ハリス侯爵はオデットの言葉に深く頷きを返した後でこう告げた。

「では、グランドール公爵は痣の恩恵を受けるに値する男性であるか？」

そう。オデットと結婚することとはすなわち、痣がもたらす幸福を相手とその一族が受け取るということになるのだ。

王族であるロイから求婚されてしまった時は断ることができず、致し方なく結んだ婚約であったが、自由に相手を探すことができるようになった今では状況が違う。

その恩恵につけ上がることなく、オデットや家族を大切にしてくれる者を……というのが父なりの思いやりなのだろう。

「はい、そう思います。といっても私の勘にすぎませんが……」

「オデットがそう言うのだから、きっとその通りなのだろう。私としてもお前が幸せになってくれるのならばそれが一番だ。グランドール公爵は家柄的にも申し分のないお相手だからな」

「カイル様と幸せな家庭を築くことができるように、精一杯努めます」

ハリス侯爵はオデットの言葉に深く頷いた後で、何やら眉間に皺を寄せ始めた。

「オデットは無事に幸せを掴むことができそうだが、問題はロゼッタの方だな……」

オデットの妹ロゼッタは、姉の婚約者と許されない関係を築いていた。

オデットがロイと婚約破棄したことで、今度はロゼッタの方に彼との婚約の打診が来ている。

姉は狂犬公爵とはいえ高位貴族の騎士団長のもとへ嫁ぎ、妹は第二王子のもとへ嫁ぐことになるのだ。この事実だけ耳にすれば、ハリス侯爵家にとつては朗報のように思われるだろう。

しかしハリス侯爵はとても険しい表情を浮かべている。

「ロゼッタが王子妃となる未来が、どうしても私には想像できないのだよ」

父の懸念はもつともであるとオデットは思った。

ロゼッタは確かに見目麗しい部類に入るだろう。

侯爵家の娘ということで、嫁ぐ際の家柄的にも申し分ないはずだ。

そんなロゼッタの第二王子妃への道のりを邪魔するのは、やはり生まれつきの知能の低さだ。

彼女は表面だけの会話なら取り繕うことができるが、国内の貴族関係や情勢など踏み込んだ話題を振られると言葉に詰まってしまう。

また世間一般的な常識も欠如しているところがあるため、その都度周囲の者たちの手で正しい方向へと導いていかなければならなかった。

どう考えても未来の王子妃になど、なれるはずがないのである。

その事実には気づいていないのはロゼッタと、愛欲に溺れているロイの二人だけだ。

「それは……そうですね、私も姉としてロゼッタのことは心配ですけど……」

聞けばオデットが狂犬公爵と婚約するかもしれないという話をロイの口から聞いたようで、彼女はかなり浮かれた様子なのとか。

それもそのはず、姉は第二王子妃となり自分は冴えない下級貴族に嫁がされる予定であったものが、ここへきて立場が逆転したのだ。ロゼッタの中で姉は悲劇の主人公のような扱いとなっていた。

——喜んでいられるのも今だけなのに……

やがて彼女は気づくだろう。第二王子妃など名ばかりで、ただの窮屈な肩書きでしかないということ。そしてロイは王族にふさわしい器の持ち主ではないということ。

いや、もしかしたら彼女はその事実ですら気づかないのだろうか？

それならばある意味、都合がいいのかもしれない。

「ですが、なるようにしかありませんので」

ロゼッタももう子どもではない。自分のしでかしたことの責任は自分で取らなければならない。

「一体私たちは、どこでその子の育て方を間違えたというのか……」

ハリス侯爵は揺れる馬車の中でひたすら頭を抱えている。

オデットの目から見て確かに末っ子のロゼッタに皆が甘い対応をしてきたことは否めないが、本人の持つて生まれた性質的なものが一番大きいのだろう。

「誰のせいでもありません。仕方のないことだったのです」

やがて二人はどちらからともなく口をつぐんだ。

——私は新しい人生を生きていく。

静まり返った馬車の中でオデットは窓の外の景色を眺めながら、カイルと再び会う日を思い浮かべてそつと微笑んだ。

◆◆◆

「というところで、カイル様……グランドール公爵様と婚約することになりました」

「は、はあ!? 本気なのか? そのような冗談、面白くもなるともつ……」

カイルとの顔合わせから二週間後。オデットは再び城の一室にいた。

ロイとの婚約を破棄する証書へ正式に署名するためである。

本当はもう二度と登城などしたくなかったのだが、今回はロイの命令ということもあり断ることができなかったのだ。

きっと彼はオデットとカイルの関係の進展について知リたかったのだろう。

婚約の予定を告げたことで万が一ロイの気が変わってしまったら困ると、婚約破棄の証書に署名を終えて受理されたことを確認してから報告したのだが、どうやらオデットのその目論見は正解だったようだ。

ロイはまるで信じられないとでもいうように、わなわなと体を震わせている。

「君は本当にそれでいいのか? 相手はグランドール公爵だぞ!? あの狂犬公爵だぞ!?」

「恐れながら……実際に公爵様とお話をする中で、そのように感じたことはございませんでした」

「たった数時間で何がわかる」

「それでも」

これまで努めて冷静に言葉を紡いでいたオデットの声が大きくなった。

「それでも、私はグランドール公爵様のもとへ嫁ぐと決めたのです。これは殿下に命じられたからでも、公爵様に言われたわけでもありません。私自身が望み決めたことですわ」

それだけ言い終えると、オデットはロイに向けてにっこりと微笑む。

その姿は先ほどまでの強気な発言が嘘のように可憐で美しく、みるみるうちにロイの顔が赤く染まっていた。

「……あいつのことが好きなのか?」

気を落ち着かせるかのように目の前に置かれた紅茶を一气飲みしたロイが、そんなことを尋ねてきた。

「まだ一度しかお会いしてませんから、お慕いしているというわけではありません」

「ならばそのような婚約は」

「ですがあの方のことをもつと知りたかったのです。公爵様とならば、温かい家庭を築くことができるのではないかと」

カイルへの思いを話すオデットの瞳には、かつての婚約者であるロイの姿など映っていなかった。

その事実気づいたのか、ロイはショックを隠し切れないようだ。

「ま、まあそのようにとってつけた婚約など、どうせうまくいかないだろう」

オデットからすると彼のこれまでの反応は予想外であり、同時に厄介でもあった。

カイルに対していい感情を持ち合わせていないロイに、彼との婚約を報告したらきつと不機嫌になり取り乱すに違いない。もちろんそのようなことはオデットも予想済みであった。

きつと実際にカイルを目にしたオデットがその風貌に恐れおののき、婚約話をなかったことにするのを期待していたのだろう。

そしていかにロイの方が素晴らしい男性であるのかを見せつけたかったのだ。

だがオデットはその予想に反してカイルに惹かれ、あっさりと婚約を結ぶことを決めてしまった。ロイからすると面白くないに決まっている。

——私と結婚する気はないくせに、これではまるで私に未練があるような言い草ね。

「うまくいくかはわかりませんが……そうなるかとは思っています」

「ふん、愛のない結婚生活など苦痛でしかないはずだ。それに引き換え私とロゼッタは甘い時間を過ごしていて、毎日が満たされている」

オデットの言葉を鼻で笑ったロイであるが、その言葉には強がりが見え隠れしているように思えた。あれから早々にロゼッタは城へと居を移しており、じきに彼らの婚約が成立するはずだ。

「そういえば妹は元気にしておりますか？ 王子妃教育でさぞ忙しくしていることでしょう」

正直に言えば、今のオデットはロゼッタのことなどどうでもよかった。

愛し愛される者同士で仲よくやっているのなら、それでいい。

だが城へやってきたというのに妹の話題に触れないのも、いささか不自然だろう。

そう考えた末での問いかけだった。

「ああ……ロゼッタは元気だ。何一つ変わらず、な……」

ロイは急にしどろもどろになる。

「妹がどうしましたか？」

意味深な台詞に、オデットは形のいい眉を顰めた。

「その、だな……ロゼッタは本当に君と血の繋がりはあるのか？ 幼い頃に養子に迎えたとか、実は片親違いであるとか……」

「ロゼッタは真正正銘両親の娘であり、私と血の繋がった妹ですわ」

「ではなぜあのようなっ……ううん……」

ロイは何かを言いかけ、途中で口を閉じた。

「あのような？ 妹が何か？」

「いや、なんでもない。気にしないでくれ」

「そうなのですか？」

「ああ！ 君もしつこいぞ！」

自分から話題を振っておきながらなんて理不尽な……と思いつつも、これがいつものロイだ。オデットには、彼が何を伝えようとしてきたのかが痛いほどにわかってしまう。

なぜロゼッタはあれほどまでに無知なのかと、きつとロイはそう尋ねたかったに違いない。この時期から急遽王子の婚約者となるロゼッタには、膨大な量の課題が課されているはずなのだ。しかもそれを短期間でこなさなければならず、どんなに優秀な女性でも苦勞することだろう。

——それをロゼッタにさせるなんて……どう考えても無理があるわ。少し考えればそんなことはわかりそうなはずだが、どうやらロイは色恋に溺れて気づくことができなかったようだ。

瘧持ちで身持ちの堅いオデットと婚約破棄し、素直で従順なロゼッタを呼び寄せ甘く乱れた生活を送ることができるか期待していたのだろう。だが早々にその期待が打ち砕かれてしまったからこそ、こうして彼はかつての婚約者に戸惑いをぶつけているのだ。

「とにかく、君にあいつはふさわしくない！」

再びオデットとカイルの婚約の話へと話題が戻され、よくわからない苛立ちをロイからぶつけられた。しかし先ほどまでのあれこれで、すっかり彼のことを憐れんだ目で見つめていたオデットは、至極冷静に言葉を返す。

「私の方こそ、瘧持ちですから。もちろんカイル様は醜いお方ではありませんが、私に人のことをとやかく言う資格などございません」

「え、あ、瘧持ち……そうか。そうだったな！ 君は瘧持ちだ！」

まるで今の今までその事実を忘れていたかのように、ロイは膝を叩くと大きな声でそう繰り返した。オデットにとって非常に不快な発言ではあるものの、もう動じることはない。動じるだけ時間

の無駄であるとわかっているからだ。

「では、私はこれにて……失礼いたします」

「えっ、もう行くのか？ せっかく淹れさせたんだ、茶の一杯くらい飲んでから帰ればいいだろう」

「以前のようなことがありましたから……念には念を、と思ひまして」

暗にロイのことが信じられないと告げているのだが、どうやらその意図は彼には伝わっていないようだ。

「ならロゼッタに挨拶は!? わざわざ城に來たのだし、妹に会いたいだろう」

「いいえ、結構です。妹もせっかくお城での生活に慣れようとしておりますのに……私がその邪魔をするわけにはいきませんから」

「姉の訪問が邪魔なわけ」

「では、失礼いたします」

これではきりがないと、オデットはロイの言葉に被せるようにして別れの挨拶をする。

そして深々と一礼すると、すぐに踵を返して応接間をあとにした。

部屋の外へ出て早足に廊下をしばらく進んだところで、後ろを振り返ってみる。

ロイが追いかけてくることはなさそうだ。

その事実にあ堵すると同時に、体の力がどっと抜けていくように感じた。

——ロゼッタをお願いしますね、殿下。